

巻頭言

お楽しみはこれからだ！



総合科学部副学部長  
高谷紀夫

「超域科目」の話から。

平成十二年度に現プログラム制を導入した総合科学部学士課程教育改革の柱のひとつが、必修科目「超域科目」の新設です。

「超域研究」「展開研究」の二部構成となる本授業科目に、今年度五期生が取り組んでいます。「展開研究」は、卒業特別研究に至るまでの中間的ハードルでミニ卒論執筆が課題とされ、同研究のポスター発表会は初夏の風物詩になりつつあります。一方「超域研究」は、同期生全員必修というユニークな構成で、様々な企画が試みられてきました。教育効果十分と断言できるほど過信はしていませんが、総合科学的思考への動機付けの場を提供してきたと、企画担当者のひとりとして自負しています。

総合科学の試みは、人の生き方や体温に近いところにあります。学問の細分化が忘

れてきた人間の存在とその営みに関する温もりある真摯な思いを、何とか論理的に伝えようとする過程が総合科学への道でもあるのです。表現する内容に悩みます。表現する方法に悩みます。表現する姿勢について悩みます。それが真摯というものです。既存の細分化された学問体系の中に逃げ込めば悩むことはないでしょう。でもそれはたまたま「人間にとって…学は？」という問いと対峙しなくてすんだからにすぎないのです。

平成十六年度「超域研究」は、(1)総合科学部生としてのアイデンティティを考える、(2)少し前を歩いている先輩からの報告、(3)「議論する苦楽」「思考する苦楽」から「研究する苦楽」へ、の三部構成でした。担当教員の協力もあり、過去のどの年度よりも受講生の発言が活発で、続々とマイクを握ってくれました。(2)で十四年度生筒井志歩さん、十三年度生朝山沙也香さんの報告から刺激を受けたことも好評でした。尚、本年度はディベート技術の習得を二次的目標としたために、より実践的な構成を望む声も一部ありましたが、自問自答と意見交換、フィードバックそして他受講生との場の共有という経験が、複合的に動機付けとなって、受講生ひとりひとりの今後の修学に何らかの貢献をしてくれることと期待しています。最終レポートからいくつか紹介します。

(1) に関しては正直あまり関心がありませんでした。総合科学が目的で入学したのではなく、この学部が特色として利用する気で入学したからです。(2)はとても良いものでした。実際不安だらけの展開研究ですので、こうして筒井さんの研究発表など見せてもらえたのは良い刺激になったと思います。展開研究発表の模造紙展示は見に行つたのですが、これがどれほどの意味をもつ研究なのだろう、研究といえるのだろうか？と疑問をもつような発表も見られたように思いました。「賀茂台地の赤瓦研究」というのは一見地味なテーマに見え私の興味・関心から多少外れているので、こういう機会がなくてはよく見なかったと思います。聞いてみたら面白かったです。朝山さんの方は、お話自体は心構えとかさういったもので「すぐく今後に役立ちそう！」という感じでは正直ありませんでしたが、オリキャンのアンケートをしているのが彼女ということを知り、実際の研究に対する熱意のようなものに触れたことはとても良かったと思います。両先輩とも私たちの前に出てきてくれたことはありがたかったです。(3)は、多分、今から味わう分の方がすっごく多いと思うので、せいぜい苦しみ楽しもうかと思つています。逆にいえば、今までの授業では半分くらいの方はあまり味わってないんじゃないかな？コミュニケーション実現のために」を

テーマとした) 議論に費やした時間が少し長すぎたかと思えます。・・・「超域研究」という名前と内容が合っていないように思えます。「超域」総合」のイメージで「総科の学活」のようにとらえれば、何とかやれましたが、開始当初は脳みそがネーミングに引きずられている感がありました。でも、総科一同、顔をそろえての議論というものは楽しかったです。もっと議論したかったです。

たつた今「2004超域研究」の授業が始まったと思っていたら、もう「2004超域研究の軌跡」を振り返る時期になったことに驚いています。卒論への中間チェックポイントとしての授業の内容は充実していたし、我々の進路の方向づけを手助けする役割も担ってくれたことと思います。

(1) 総合科学部生は、総合的で大きな特徴・長所がないと以前私は考えていたことがあります。それは明らかに間違った考えであったと反省しております。総科生とは、様々な分野を多面的に考察する中で各自の本来に意欲的に研究したいあるいは興味をもちたいことを探しだし、自らに一番適した進路を決定できるという抜群に優れた特長をもつ学生であると改めて今感じています。この授業の中で教員たちはあまりお話し・意見発表をされませんでした。他の学生の意見・教員の授業の運び方を視聴する中でそのことを感じたのです。(2) 長い目で見たら、「かなり前」でなく、「少

し前」を歩き進んでいる先輩からの話は、私にとって「進路決定づけの過程」のサンプルを入手することにつながり、良い刺激に他の学生たちにとってもなりそうだと考えました。(3)「議論」は、自分では百も承知でも相手には一しか分かってもらえないこともあり、話し役・聞き役が努力しあうことで初めて相互理解が達成するのだと思います。「思考」も「学問の道に王道なし」と同じで、Plan/Do/Check/Actionを際限なくする努力が必要だと知りました。

入学当初の僕にとって、「総合科学部のアイデンティティ」とは「文系と理系の科目を融合させてより幅広い知識と能力を身につける場所」という教科書的なものでしかなかった。つまりそれに対する実感がなかった。しかし入学後ゆっくりではあるけれど、学部アイデンティティ(というより自分自身のアイデンティティ)について思いをめぐらせ、自分の中で教科書的なそのことばにも実感が伴ってきた気がする。実際に動いてもまだ漠然とした部分もある。「超域研究」では、特に初めの2、3

回の授業で他の人も悩んでいることが分かり少すつきりした。先輩二人のプレゼンで役に立ったことは「研究のテーマを決めていく過程」についての話だった。筒井さんは、テーマ選びに迷いながらも「自分で調査することができるもの」というコンセプトを立てたと言っておられた。せつかく何かを研究するのだから本だけで済ませる

のは僕も嫌だから、この意見には同感だった。「超域研究」で僕が最も苦痛だと感じたのは、自分が思考したことを人にうまく説明できないということだった。頭の中ではことばが浮かんでいても、口に出すとうまくいかなくなる。内容の順序がばらばらになったりことは足らずで相手に伝わらなかつたりする。僕がマイクでしゃべったのは一度だけだったが痛切にそのことを感じた。しかし先にいったように、他人と意見を交わせたことは有益だった。

「超域研究」での動機付けを受け、総合科学部を通過していく学生諸君はこれからどんな物語を紡いでいくのでしょうか。既存のマニアルばかり参照して目標への最短距離をねらうのではなく、良い意味での寄り道・回り道をしながら、平成十八(二〇〇六)年度に大学院総合科学研究科(仮称)の創立をめざす総合科学部の一員として、その紡ぎ出す物語を、今まで以上に厚くかつ豊かなものにして欲しい。

『総合科学物語』は、過去三十年間、実に社会に送り出した先輩たちが築いたひとりひとりの「名もなき物語」という財産があるからこそ、ひとりひとりの活躍が生き生きと輝いているのです。ひとりひとりの『総合科学物語』。主人公はあなたです。お楽しみはこれから!